

# 学園ニュース

富山大学

NO. 54

編集 学園ニュース編集委員会 発行 富山大学

昭和61年12月10日



学内風景（その19）図書館前の日曜日 尾崎 永治

## 目次

学部長就任の挨拶と若干の独白	経済学部長	武 暢 夫	2
教育学部新移行生諸君に	教育学部教務副委員長	加瀬 正 二 郎	3
新任教官紹介及びあいさつ			4
ウィーン—食生活の印象—	人文学部助教授	服 部 良 久	9
ハレーすい星とニュートン	経済学部教授	増 田 信 彦	10
中国「老百姓」の世界にふれて	教養部助教授	気 賀 沢 保 規	11
ニューイングランドでの一年	教養部助教授	三 原 健 一	12
富山の雪の総合研究	教 養 部 教 授	藤 井 昭 二	14
私の日本（富山）体験	外国人留学生（工学研究科）	ロベルト・リバス・カストロ	15
留学の感想	外国人留学生（工学部）	李 東 盧	16
私の留学生活、私の先生たち	外国人留学生（人文科学研究科）	蘇 思 純	17
学部だより			18
学生部だより			24

## 学部長就任の挨拶と若干の独白

経済学部長 武 暢 夫

去る9月30日付で経済学部長に就任しました。学部長としてなすべき仕事をやっておれば、それでよいわけですが、新学部長が「学園ニュース」に一文を寄せるのが慣例ないしは義務ともなっているようなので、一応の挨拶をさせていただきます。御承知のように、経済学部は61年度から昼夜開講制を発足させました。この制度の導入にふみ切るにいたった事情、制度の内容等については本誌52号に前学部長龍教授の要をえた解説が掲載されていますので、ここでは繰り返しません。この昼夜開講制をどのように運営していくかが経済学部にとってこれからの大きな課題の一つとなります。ただ、昼夜開講制は今のところ文部省の行政指導という形で行われているので、まず第一にその制度的確立が必要であり、他にもいろいろ難しい問題があるようです。現在、この制度を採用しているのは本学部を含めた5大学ですが、62年度から電気通信大学、63年度から埼玉大学（経）がこれに加わりますし、他にもこの制度の導入を考えている大学がかなりあるようなので、それが一つの流れとなっていくことも予想されます。これらの大学の協力によって次第に問題解決の道が開かれていくものとやや楽観的に考えています。昼夜開講制の実をあげるためには、本学部教職員の努力もさることながら、他学部・部局の御支援を仰がねばならぬことも多いと思いますので、特記して、よろしく願います次第であります。

もちろん、経済学部にとっての問題は昼夜開講制だけでなく、学部独自の問題、あるいは全学にも共通する問題がいろいろあります。列挙することはさし控えますが、当面、外部から押し寄せてくる大学制度変革への波にどのように適切に対応するかが最大の問題であることはたしかでしょう。ところが、私の現状を考えてみると、日々の仕事を処理するのに追われているだけという始末で、これではいかんと反省しています。生起する事態の意味をよく見究めて、進むべき方向を見失わないようにしなければなりません。経済学部はもちろん、他の学部・部局の方がたからもできるだけ御意見、情報をいただきたいと思っております。学部長としていたらぬ点も多くあると思っておりますが、どうかよろしく願い申し上げます。

学部長の挨拶としていべきことは以上に尽きます。

ところが、これだけでは編集委員が要求された原稿枚数の半分にも足りません。おそらく、委員としては学部長就任に際しての抱負とか、教育観とか、学生への教訓とかを求めておられるのではないかと思いますが、そんなことは気恥ずかしくて書く気になれません。もっとも、「学園ニュース」は殆んど読まれていないようなので、余り気にする必要がないかもしれませんが、それにしてもであります。そこで、以下はとりとめもないことを書いて枚数合わせをすることになりますので、読み飛ばして下さい。本誌作成のための資源、費用、時間、労力の無駄に役買うわけですが、やむをえません。編集委員会の御努力をやゆして喜んでいくわけではありませんが、本誌を意義あらしめるためにはもう一工夫、二工夫が必要と思われれます。ただし、私には名案はありません。

さて、学部長の抱負など書けないというのは学部長は変に抱負など持たない方がよい、少なくとも語らない方がよいと思うからであります。いうまでもなく、学部運営の中心は教授会にあり、教授会で決まったことをしかるべき手続きに従って実行するのが学部長の職務であり、学部長個人がどう考えようと、この線を外れることはできません。しかも、学部長は外部に対しては学部を代表する立場にあります。したがって、学部長がむやみに抱負を語ることは事情を知っている人にとっては空虚な自己顕示にすぎず、事情を知らない人に対しては誤解と幻想を与える点で有害無益であります。学部長が発言に注意せねばならないゆえんはここにあります。学部長が独自性を発揮できるのは教授会の招集と教授会の議長として可否同数の場合には決定権を行使できるぐらいのことでしょうか。もっとも、後の場合は問題が重要であればあるほど、大変な重味をもつこととなりますが、こういう権利が行使されるのは必ずしもよい状況ではありません。そんなことがないように願っております。

教育観については、私なりのものはあります。しかし、ささやかな研究の成果を発表し、あるいはそれを授業でできるだけ平易に伝えるのにも苦勞している現状です。例えば、或日の授業が終った後、一部の学生の話が聞くともなく耳に入ってくるに任せていると、一応の努力の結果も「なあん、わからんちゃ」の一言

で片づけられているのです。いささか慄然たるものがありました。試験の結果をみると、授業の趣旨を理解してくれているような答案もかなりあるので、一安心しました。しかし、やはり「わからんちゃ」族の方が圧倒的に多かったのです。

こういう状態ですから、偉そうなことをいえたものではありません。また、今の学生諸君は少し教訓を垂れたぐらいで心を動かすような生易しい存在ではありません。生半可な教訓などは恰好わるいと軽蔑するだ

けでしょう。それではどうすればよいのかということが今後の最大の課題となりましようが、頭の痛い問題です。

ともあれ、これで曲りなりにも責任枚数に到達したようです。前にもことわりましたように、たまたまこの雑文に目をとめられた方は前半だけを御覧になって意のあるところを御推察下さい。後は私のひとりごとです。

## 教育学部新移行生諸君に

教育学部教務副委員長 加瀬 正二郎

この文章が人目に触れる頃には、専門課程へ進級して、履修計画をたてるのに戸惑い気味だった2年生も、それぞれのプログラムに従って多忙な日を過していることであろう。大分以前のことであるが、専門課程へきたらお風呂へもなかなか入れないと、嘆いた学生がいた。それは極端としても、慌ただしいのが専門課程の特徴なのであるが、多忙さの中に多少なりとも余裕を生み出す努力がまず課題であるように思われる。

余裕のないところに学問の成り立たないことは、schoolの語源が「閑暇」を意味するギリシャ語であることを引くまでもなく明らかである。教室から教室へと走るのではなく、専攻の分野にある程度集中的努力をすることが、専攻生としてまず重要である、と言わねばならない。

ところで、教育学部は各校種ごとの教員養成課程として編成されている。しかし、学生は所属の課程の免許状と、さらにそれ以外の学校の免許状を取得するのが普通になってきている。また、中学校の複数の教科の免許状を取得する者も少なくない。学生の側では採用試験受験の選択幅が広くなり、自分の多様な関心を満足させようという利点があり、採用側からみれば、異校種間の人事交流が容易になり、中学校での教員配置を効率化するなどの利点がある。大学のカリキュラムも複数の免許状取得が可能のように配慮されているのだが、この点について、心するよう少し注意を喚起しておきたい。

教師としては、出来るだけ広い教養、学問的基盤を持つことは重要である。従って、幅広く科目を履修することはその目的に合致する。しかし、今日の専門の

細分化と進歩の激しい時代にあって、専門として一つの分野にある程度通ずるだけでも容易ではない。複数の免許状を取得することも必要ではあるが、虻蜂取らずにならぬよう、主専攻を中核に据え、その他の科目との有機的結合をはかり、慎重な履修計画をたてて努力することが望まれる。

とくに、科学技術の進歩、知識の爆発の時代にあって、教師の役割りは重要性を加えている。教育に携わるには学問研究の機能を何ほどか兼ね行なうことが要請されるのであって、そのための基礎を学部時代に築くことが求められているのである。本学部で、「特別研究」を課しているのもその趣旨から出ていることを銘記してほしい。

さて、今日の教育界には、いじめ、非行をはじめ、問題がないわけではない。その中で、教師の実践的能力が重視されるようになってきているのも周知のことである。採用試験にも模擬授業が課せられるようになってきた。諸君の中には、教師としての適性に悩んでいる人もあるいはいるかもしれない。誰しも多少の不安は持つであろうが、種々の講義から教育への理解を深め、附属学校園での授業参観、事前指導、実習と真面目にステップを踏んでいけば、まず心配するには及ばない。合宿研修などの行事もあり、積極的に参加することが大切である。(問題を感じたらすぐ教官や学務係に相談することを勧めたい。)

そうは言うものの人の師となることは難しいことである。私自身も長い年月を教師として生きてきたが、省みて忸怩(じくじ)たるものがある。ただ、優れた教師は一朝一夕に生まれるものではあるまい。迂遠(



## 新任の御挨拶

教育学部附属教育実践研究指導センター  
教授 佐々木 光三



久しく県内の中学、高校などに勤務いたしました。このたび教育学部に参ることになりました。最後の勤務校が、ふたつとも大学から一番近い高校であったのも何かの御縁かと思えます。お願いの筋などで大学を訪問する機会はありませんでしたが、ゆっくり学内の配置や風致を眺めることもなかったことに改めて気がついたりしています。

本学の名誉教授には私の旧師も多く名を列ねておいでになり、単に地縁というだけでない学恩と親しみを覚えてきました。しかし正直に言って、今まで大学という存在は個人的な気持ちとしては、なつかしさの源泉以上に出るものではありませんでした。私の数少ない愛唱歌(?)に古いドイツの学生歌があります。楽しく自由だった大学当時を思い、時の流れのもたらすものに“O quae mutatio rerum!”と嘆するところが、私の心情に甚だ近かったのです。

もちろん教育のことに携るものとして、高等教育機関の動向に深甚の注意を払ってきたことは当然です。

しかしこの点についても、大学は生徒の進路として考えられ、入試改革への関心にせよ、それは高等学校の教育課程に重大な影響を及ぼすからであり、一方また大卒者の資質能力についても、よき教職後継者のそれという観点に偏り過ぎていたかもしれません。

図らずも機会を得て、これまで門の外から眺めていただけの大学の日常に触れることが許されることになり、一種の当惑と同時に自分なりの期待を抱いています。数十年に及ぶ公立学校勤務で、いわば日々手から口への生活を送ってきた身として、体験の総括から果して何かを産み出すことができますかどうか。しかし一方また諸先生や学生諸君からさまざまな示唆を得て、いくらかでも学部教育のためにお役に立つことができるとしたらこの上ない喜びであるとも思います。

もともと、門外漢としての長年月のあと、大学人として自明のことどもも、たやすくは会得し難く、また時にはお耳障りなことなどもあるかもしれません。当面御寛容をお願いする次第です。

前任の屋敷教授は出会い能力の大小ということをおられます。いわゆる参学眼力の及ぶ限りは、この場合もまた妥当するものと承知してはいますが、万般よろしくお教を賜りたいと思います。

## 新任の御挨拶

教育学部助教授 加藤 征江



私は富山県の隣の石川県の出身であります。高校卒業後、東京の大学で学び、そして母校で少しの間、勤めた後、福井大学に出ました。その後、石川県へ戻り、生れ故郷の近く、鶴来町というさほど大きくない町に居をかまえ、金沢市郊外のさる私立のキリスト教系短期大学に勤めていました。この度、御縁があり、富山大学に採用していただくことになり、10月1日付で着任致しました。こちらへまいりまして、まだ1ヶ月位しかたっていませんし、しかも週末は石川県で過

しますこともあって、石川県と異なる富山県の姿をほとんどとらえることができずにいます。ただ時々通る庄川や神通川の広大さに驚かされ、石川県の金沢市内を流れる犀川や浅野川と比べて、非常に趣きの異なるのを、両県の差を見るようで、おもしろく感じています。そのようなことでありますので、専門は食物学ではありますが、富山の食物、およびその味についてはまだ何とも申し上げることはできません。おいおいに石川と異なる富山の食物を探って行きたいと思っています。このように、のんびりと構えている所が石川県のなのかもしれません。

一方、研究室での仕事としては、食品から食物に作りかえられることにより、その成分、あるいは物理的

性状がいかに変化を受けるのかを実験により探り、あるいは、パネラーによる官能テストを通して、嗜好的、栄養的に望ましい食物、および調理加工方法の科学的解明が少しでもできればと考えていますが、何分、力

不足のためにスムーズに行くとも思えません。何卒、いろいろ御教示いただければ幸いです。

最後になりましたが、教職員、学生の皆様、未熟者ですが、よろしくお願い致します。

## 新任の御挨拶：富山に来て

経済学部助教授 斯波 恒 正



と言ってもこの原稿を書いている時点では、富山に赴任してまだ二カ月で雪も見えない状態ですから富山に就いて書くと言うのも適当ではありません。ですから思い付くままに永く居たアメリカと日本の違いに就いて書いてみましょう。

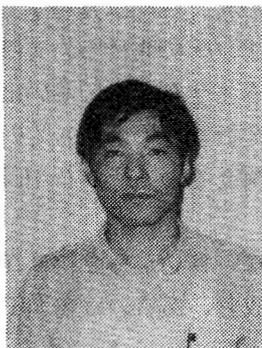
(1)物価：今では数年前の1ドル＝¥250から¥150になったのですからドル換算すれば総て高価に見えるのは、当たり前でしょうが一億総中流意識とやらのせいかな英語で言う stripped-down or bare-bonesの物がないのには、頭が痛くなります。つまり何もオプションの付いていない電気製品や自動車等日本には、売ってないのではないかと疑いたくなります。それに昔沢山有った急行に替わって高い新幹線を使うしかないと言うのはどういう事でしょう？アメリカですと日本からの物は、大体高級品ということになっており、捜せば韓国や台湾からの安いものが手に入ったものでした。高価なものは余り縁がなかったのですが、買おうと思ったら一つの物で極安い物から高級品までバラエティに富んでいました。一人当りの所得がドル換算で欧米を抜いたとか言う暇があったらその金で本当に豊かな

生活が出来るようにして欲しいものです。その為に幾つかしなければならぬ事の内、輸入拡大は大切な事です。

(2)交通：アメリカで憧れていた『日本車』を（アメリカでは日本車なら大抵の米国産の車よりも良い事になっている）手に入れましたが走行料金の高い高速道路で速度を上げるくらいで滅多にアクセルを踏み込んだ事はありません。皆綺麗な高級車を持っていて乍らよく制限速度を守っているなあ、と思います。勿論、道が狭いことや自転車が危ないことは知っていますが、日本人は、役人の言うことを良く聞く気嫌いがあるのでしょうか？歩行者まで信号が緑に変わる迄じっと待っているのに最初は、驚きました。自分で判断して自分の責任で渡れば良さそうなのだと思うのですが、しかしこの議論は、無謀な自転車には適用できません。中高生は、どうしてあんな自殺行為まがいの運転をするのでしょうか？尤もマンハッタンの自転車は、世界一無謀で危ない事は認めますが、これに関連して米国では車のライトをつけるのが日本（富山特有？）よりもずっと早かったように思います。夕方薄暗いのにせいぜい車幅灯しかどの車もつけていないのは、何か節約している積もりでしょうか？皆様、宜しくお願い致します。

## 新任の御挨拶

教養部講師 豊 泉 周 治



豊泉と書いてトヨイズミと読みます。こちらでの生活に慣れるにつれて、水の豊富な富山を連想させて相性が良いのではないかと、ひとりで納得しています。7月1日付で当大学に赴任しました。専門は

理論社会学で、教養部の社会学の授業を担当します。

出身は埼玉、大学は一橋ということで、富山大学で数すくない生粋の関東系ですが、大学時代ワンダー・フォーゲル部にいた関係で、個人的には富山はなじみ深いところでした。夜行で上野を発ち、早朝の富山駅で地鉄乗り替え、立山・剣あるいは薬師へと向かうお決まりのコースは、自分の大学時代の記憶の大部分と

重なり合うものでした。梅雨どきにこちらに来て、なかなか望めない山々をうらめしく思っていました。10月中旬の頃、富山市街の向こう側に忽然として浮かび上がった冠雪の立山連峰を目にしたときには、あらためて富山に移り住むことになった自分の偶然に、驚きとともに深いなつかしみを覚えました。

大学時代のそうした経験のためか、あるいは関東の乾いた自然のなかで育ったためか、まだこの地で数ヶ月を過ごしたただけですが、富山のしっとりとした空気の落ちつきと、ゆっくりと流れる時間が気に入っています（もちろん美味しい魚介類については言うまでもありませんが）。波長が合うというのでしょうか。もともと埼玉の田舎で育ったため、東京都心の雑踏にはあまり近づけなかったほうですが、それでも富山の街を歩いてみて、ゆったりとした空間と時間に身体の拡

がるような思いを感じました。ゆっくりと歩けることは人間的な豊かさの一つの核心なのではないか、などと考えてみたりもします（その点、富山の車両のせわしなさはいただけません）。

もうすぐ冬。もちろん冬の富山ははじめてですが、大学時代、サークルの山小屋が新潟県六日町の山奥にありました。5～6mの雪をラッセルし、夏なら30分程の道のりを3～4時間かけて山小屋にたどり着きます。そして雪見酒。ですから富山の冬に心配がないわけではありませんが、半面楽しみも大きいわけです。

富山の豊かな自然は、人間と学問とをゆっくりと豊かに、そしてより人間的に育てるのにふさわしいように思われます。微力ながら努力したいと思います。どうかよろしく願いいたします。

## 新任の御挨拶

教養部講師 松崎 一平



この9月16日付で講師として教養部に着任いたしました。倫理学を担当いたします。

大学の専門課程在学中からずっと教父哲学の代表的思想家であるアウグスティヌス（354年～430年）を勉強し続けております。多岐にわたるアウグスティヌスの思想の

なかでも、罪とか悪とか、あるいは人間の意志の働きとかの倫理的な問題について書かれた諸著作（例えば「越」の国と関係の深い所。堅田の近くにも義仲や蓮如にゆかりの旧跡が多く、いわば北陸の入り口にて待期していたわけです。原産地が九州ですから耐寒・耐雪能力の点ではなはだ心細く、皆様に富山の冬の厳しさを教わるたびに恐々としております。冬を暮す知恵をお授け下さいますよう、どうかよろしく願いいた

『自由意志論』とか『告白』とか）に興味を持ち、幾つか論文をまとめてまいりました。これからはアウグスティヌスを中心にしながらも、西洋古代・中世の他の思想家たちの著作をすこしづつ読み始めて、できるだけ知識を広げてゆこうと考えております。富山大学の恵まれた環境がそれを可能にしてくれることを確信しております。

高等学校を卒業するまで九州は大分県ですごしました。昭和47年4月に大学に入学して以来ほぼ14年半京都およびその周辺で生活いたしました。特にこの2年半は近江の国は堅田に住んでおりました。近江は古来

します。まだ未経験の冬のことを除きますと、住み始めてわずかひと月余りではありますが、富山の風物にも人情にもすっかり魅せられております。その奥深さをこれから体験してゆけることを楽しみにしております。

皆様どうかよろしく願いいたします。（11月5日）

## 着任のご挨拶

「富山は、さしずめロンドンですね」

教養部講師 筒井 洋一



9月16日から教養部において政治学を担当することになりました。既に後期学期に入ってから、教養部生のふるまいもなんとなく大学生らしさが板についてきているようですが、私の方はまだお世辞にも教官らしい風格があるとは申せません。ひと冬越せば、少しはましになるかもしれませんが……。

初めて見た立山について感想を一言。ある教官も私と同じような印象をお持ちになったようですが、北陸自動車道を通って西から来富した時に見た、金色に輝く絶壁のような立山の姿は、美を超越した畏敬の念を私に抱かせました。そういえばこの情景はある自動車メーカーのCM（サッチモの唄が流れていた）と似ているな、けれど私の車は別のメーカー製だ、などと現実を引き戻す言葉がようやく私の脳裏に浮かんで来て、落ち着きを取り戻すことができました。

話は変わりますがけれども、ある友人が、神戸（私が学生時代を過ごした都市）・京都（私の出生地）・富山の三都市の特徴を、ヨーロッパ（私の研究対象で

ある）の三都市の位置関係におきかえて次のように形容してくれました。「ところで、神戸、京都、富山の三都市は、ヨーロッパで言うと、どこに位置するのか考えてみたことがありますか。神戸は、南にあって温暖だからニース。京都は、真中にあって山に囲まれているからジュネーブ。そして富山は、北にあって（筒井さんの）就職先だから、さしずめロンドンですね。」このように云った後、彼は更に続けて、「聞くところによると、最近、富山は演劇などの国際交流やハイ・テク産業などで脚光を浴びているようで、（筒井さんの専門である）国際関係論の研究には持ってこいの土地ですね……」

この話を聞いて以来、私にとっては富山という町が更に近くなったような気がしてきました。「地方の時代」と云われる今日、全国各地で新しい「故郷（ふるさと）づくり」が始まっています。そこでは、古くからの住民とともに、新しい住民も加わって独自のアイデンティティを模索していますが、私もその一端を担えればと思っております。教職員の方々や学生諸君には、こうした私の気持ちが、研究に、生活に、と生かされますようご尽力をお願い致します。

## 新任の御挨拶

教養部講師 菊川 茂



9月から、生物学担当者として本学に赴任しました。それまで勤務していたトロント大学を退任、6年半にわたる北米での生活に終止符を打つことにしました。帰国、そして富大着任にあたっては、いろいろな方にお骨折りいただき、ここに改めてお礼申し上げます。

教養部では、昆虫を材料とした神経内分泌学的研究を考えております。諸先生方の足手まといにならないよう教育・研究に努力する所存ですので、よろしくお願い申し上げます。

## ウィーン — 食生活の印象 —

人文学部助教授 服部良久

85年8月末から一年足らず家族と共にウィーンに滞在した。この間に得た多少とも新しい生活感覚は、帰国後驚くべき速度で失われつつある。さて思い出として何を書いたらよいだろう。この間の生活の基調は大学での研究であるが、ときにはオペラやオペレッタも楽しみ、またウィーンの森、ティロルやザルツブルク地方の自然にふれる機会もあった。この他、東欧と西欧の境にあって700年の帝都としての歴史をもつウィーンの光と陰を語るためのタネは尽きない。しかしこれらについては気のきいた旅行案内書に任せ、ここでは日常生活の中で、胃袋人間たる私の記憶に比較的よく残っている、食べものに関することを記してみたい。

私と家族は原則として自炊していたので、食糧品の購入は（基本的には妻の）日常的な仕事のひとつだったが、スーパーを含め全ての商店（食糧品店のみではない）が平日5時半、土曜は12時半ごろには客を追い出してさっさと閉店、日曜祝日は休業（この他平日に2～3時間の昼休みをとる食糧品店が多い）という想像以上の商売気のなさに苦しめられた。キリスト教の祝日等で連休となる前の日の買い出しには私がお供をするのは事の必然であった。個人商店が夏期に1～2ヶ月休業する、或いは主婦が費用捻出のため強盗をはたらく、といったこの国の人々の異常なウアラウブ（ヴァカンス）熱は別としても、毎日の閉店時間は実は法律で定められたもので、ウィーンにおけるその厳格さは他国に例をみぬほどのものである。共働き夫婦の場合これでは土曜日の午前中しか買いものができぬというので、昨年当該法の変更による営業時間の延長が市当局より提案されたのだが、新聞でみるかぎりでは一般消費者の立場をのぞけば、雇用者（店主）も被雇用者（店員）、労働組合も、各々人件費の増加、労働時間の延長（勿論手当付）を理由にこの提案にきわめて批判的であった。せいぜい月に一度だけ土曜日の午後商店を営業させるという提案について喧々ごうごう、議論が百出するという事態は、既に充分すぎる余暇、休暇を得ているように思える一般労働者が、週労働時間40を36にせよと要求し、政府がこれに一応の理解を示していることを考えれば、さほど奇妙なことでもない。自身の自由な時間を大切にす当地の人々にとって、たとえ個人商店主であっても、お客様は神様、

という資本主義の論理は必ずしも通用しないのである。24時間営業という日本にも現われた新型スーパーが彼らの想像力の射程外にあることは言うまでもない。

ウィーンで美味しかったものは何だろうか。ハプスブルク帝国の首都であったウィーンの料理は、ドイツ、イタリアの他、東欧料理の要素がとけ合っていて、ドイツ語圏ではめずらしく多彩であるが、ここではまずアルコールについて語ろう。かのスキャンダルにもかかわらず、白を主体としたオーストリア・ワインは安価でさっぱりとした口あたりが気に入り、愛飲した。4～500円も出せば上質のものが手に入る。また市内ならワインケラー（地下の居酒屋）、郊外や農村部に出かけると、その年に出来た自家製ワインを飲ませるホイリゲがある。何れも1/4ℓグラスで150～200円、食べ物代を含めても1000～1500円程度。学生のコンパ会場にもなる。閉店の12時ころまで暖かなワインケラーで知人と談笑した冬の一夜、農家の中庭そのままの素朴なホイリゲで過ごした、さわやかな初夏の夕のひとつきは忘れがたい。オーストリアのビールも本場ドイツのそれに劣らない。日本の地酒同様銘柄は多様、さらに味、アルコール度、価格も様々だが、平均的に日本のビールの半額以下。喫茶店ではコーヒーよりビール（300～500cc）の方が安い。大学では図書館でも本の横にビールびんを置いている学生をよく見かけた。銘酩して他人に迷惑をかけることさえしなければよいのである。

古都の住民らしい洗練された生活と社交のスタイルをもつウィーン市民ではあるが、食べることについての彼らの奔放、不節制には度々驚かされた。有名なザッハートルテをはじめ、カフェコンデイトライのショウケースに並ぶウィーンの菓子の華やかさは、とくに甘党でもない私にもつい手を出させるほどだが、当地の人々は糖分と脂肪の固まりのようなこうした菓子類に全く目がない。大学食堂などセルフサービス式の食堂にも必ずこのような菓子を置いたデザートコーナーがあり、メインディッシュをとらず、生クリームをたっぷりのせた巨大なトルテ（ケーキ）だけで食事を済ませる人もめずらしくない。当然の報いとして肥満をまねくことになるが、中年以上の人間の大半がこのタイプに属することは許せるとしても、（私の住居の家主

夫妻の体重は各々 100 kgと70kgだった。)学生の間にも男女を問わず肥満者が目立つのである。無理もない。ゼミ旅行で3日ほど行動を共にした学生、とくに女子学生たちが四六時中示した旺盛な食欲、甘いものへの執着。食生活に関するこうした節度のなさは、青少年のこれ見よがしの喫煙(大学の建物内は巨大な灰皿と化していた)とともに、この世代の一種の欲求不満の捌口のようにも思われる。老人社会であり大人社会であるウィーンにおける青少年の抑圧と不満については別の機会に述べてみたい。今ひとつ目立つのは路上でものを食べる。子供や若者はともかく、正装した紳士が信号で立ち止まるや、かかえていた紙袋から突き出したパンにやおらかぶりつく、高級車から降り立った淑女がハンドバックから生の人参をとり出し

て嚙り始める、毛皮コートに身を包んだ中年女性が歩きつつ、大口開けて紙皿上のソーセージに食らいつくといった光景は日常のものである。彼らが、レストランなどでは完璧なマナーを示し得る人々であることをおもうとき、日本人としては、まことに文明から野蛮はほんの一步なのだ実感してしまう。同じく着飾った婦人が目抜き通りの真中で連れ歩いていた高級犬(ウィーンではステータス・シンボル)に平気で脱糞させるという、よく見かけた光景は、むしろ文明と野蛮の奇妙な並存というべきものかもしれない。さてこうした文明と野蛮の間にあるウィーンの伝統的な文化的な生活空間たるカフェについてもふれたかったが、与えられた紙数はすでに尽きている。

## ハレーすい星とニュートン

経済学部教授 増田 信彦

「泰山鳴動して鼠一匹」と言うのか、このたびのハレーすい星は、約76年に一度しか見ることのできないすい星として期待したにもかかわらず、肉眼で見ると、北半球の多くの地域では見えるのか見えないのかはっきりしない状態で、まことに失望を禁じ得ない見ばえであった。私が在外研究員として滞在していたケンブリッジ大学でも、ハレーすい星の公開講演会が行われたり、大学図書館のホールにすい星に関する歴史的な文献、詩、絵などが陳列されていた。その中には紀元前7世紀に現れたすい星に関する世界最古の中国の記録の写し、これから述べるハレーとニュートンの間で交わされた手紙、ラテン語で書かれたニュートンの「プリンシピア(原理)」やハレーの「すい星の天文学の概要」の原稿の一部や初版本などが含まれていた。

17世紀の後半というのは、天体の変化、特に大きなすい星の出現が、地球上に何か悪いことが起きる前兆と見なされた時代からそんなに年数がたっていない時代であった。そのような1680年と1682年に大きなすい星が現れたことは、当時の社会で大きな関心を引いたということである。天文学者ハレーはすい星の運動との関連で引力の問題の重要性に気づき、ケプラーの法則から引力が距離の二乗に反比例することを得ていたが、引力から惑星の運動を導き出すことができない

でいた。そこで、1684年にケンブリッジ大学のニュートンを訪ねて、ニュートンが20年ほど前に引力が距離の二乗に反比例すること、5年ほど前に引力から惑星の運動を導き出していたことを知った。ハレーはこれらの結果を公表する必要性を感じたので、ニュートンにそれらを出版するように勧め、自分で出版費用を出し、校正までして、万有引力の法則についてまとめた「プリンシピア」を1687年に出版させたと言われている。

更に、ハレーは1695年頃万有引力の法則を最初に適用することにより、24個のすい星の軌道を計算し、そのうち1531, 1607, 1682年の3つのすい星が非常によく似ており、これらが同一のものであることを確信するようになった。そして、このすい星が1758年に再び現れることを予測し、これらを「すい星の天文学の概要」として1705年に出版した。ハレーもニュートンもすでにこの世にはいなかったのであるが、1758年のクリスマスにハレーすい星と呼ばれるようになるこのすい星が実際に現れたことは、ハレーの予測が正しかったことを証明すると共に、ニュートンの万有引力の法則を万人に認めさせることにもなったと言われている。

「プリンシピア」は一つの自然法則が天体、潮汐、地球上の物体の運動などの現象を説明することができ

ることを示したものであった。このことは、宇宙が自然法則によって支配されていることを意味し、「神」が宇宙の創造者であるとはされたものの、コペルニクス、ガリレオ、ケプラーなどの地動説によって相当権威を落としていた「神」を宇宙から完全に切り離すことになった。

また、経済学においてもアダム・スミスを初めとする古典派経済学の考え方に大きな影響を与えたと言われている。というのは、宇宙が自然法則によって自動的に動いているのであれば、経済も「レッセ・フェール（自由放任主義）」で干渉なしに運営した方が望ま

しいのではないかと考えられるからである。すなわちそれまで長い間信じられてきた利子の不道徳性や慈善の美德などを無条件に受け入れる必要はなく、個人が自由に自己利益を追求することが経済全体にとってもよいということになる。

今年3月13日の深夜に、ヨーロッパ宇宙局が打ち上げた探査衛星「ジオット」がハレーすい星のしっぽに突入するのを、BBCテレビの実況放送で見ながら、ハレーやニュートンのいた時代に思いをはせ、その時から現在までの科学技術の進歩に感慨を新たにされた次第である。

## 中国「老百姓」の世界にふれて

教養部助教授 気賀沢 保 規

昨年9月より今年の8月まで、私は歴史研究のために中国に滞在した。一年近くにわたるこの生活をふり返るとき、とりわけ懐しく思い出されるのは、数えきれないほど多くの人びとに出会い、世話になったことである。知識人・大学関係者を始め多方面におよんだその関係のなかで、ことに一般人、いわゆる「老百姓」との交流は、私にとって忘れがたいものである。そうした人びとの一面を知ってもらうために、ここで私の体験の一部を紹介したいと思う。

この7月、私は当時住んでいた西安から、敦煌や吐魯番などの西北地区へ調査旅行に出た。そしてその帰り土砂崩れのため途中の蘭州という町で車を降ろされてしまった。途方に暮れたが、幸い駅前に西安行の長距離バスが停っており、それに乗ることにした。

ご存知の方もいるだろうが、中国の普通のバスは、お世辞にもよいとはいえない。座席は板にスポンジをしきビニール皮で覆った簡単な作りで、窓ガラスもよく割れたままである。加えて市外に出ると道路は悪い上に、起伏や曲折にとむ。そこをかなりのスピードでとばすから、しっかり前の鉄棒をつかんでいなければならない。勢い車中では気分を悪くして嘔吐する人があちこちに出る。だが乗客は一方で、大声で談笑しながら、買いこんできた砂糖キビやヒマワリの種を食べつつ、食べカスをとこまわず吐きちらす。唾や痰も吐く。子供でもいると、入口付近で放尿もさせる。かくして車内はさながら馬小屋のごとき観を呈するに至るが、私は、そこに生きた中国の現実をみる思いがし、またそうした中から生まれるある種の親密感に、

何か共感すら覚えたものである。

この蘭州—西安間の乗中で、私は、二人の若い農民と知りあった。その発端は、発車をまつ間に私が日本語で筆記していたのを前の席からのぞきこんできた、その一人の言葉からである。かれはいった、お前の書いているのは英語か、英語でも漢字を使うのかと。私は一瞬その意味がわからなかったが、すぐ了解できた。本当におかしかった。しかし笑うわけにはいかない。これは日本語だと説明してやると、かれは目を丸くし、お前はそれをサラサラと書いている、すごいではないか、どこで習ったのか、と大声でいう。私を中国人と誤解していたのだ。まちがえられて内心悪い気はしなかったが、そこでおもむろに、自分は日本人である、中国の歴史を勉強しているのだと答え、やっと納得をえた。

ついでにいうと、内陸部の西寧という都市で、ホテル近くの食堂で麺を食べているとき、一見して欧米系とわかる男女が入ってきて英語と身振りで食事を注文した。それをうけた若い従業員同志が、かれらは日本人かしらとささやきあっている。日本人は私の方なのにとおかしく思ったが、かれらにとって外国といえはすぐ日本が連想されるらしい。そして前述の農民は、外国語からただちに英語を発想した。内陸部に住む一般人たちの外国認識の一端が知られよう。

ともあれ、これをきっかけに、われわれは雑談するようになった。粗野ではあるが、純朴で底ぬけに気のいい二人は、家が隣のいところで、夏の作付けの一段落した暇に、行商と観光をかねて出かけた帰りであった。

そういえば、いま中国の各都市には、農民らしい身形のものたちが、様々な産品をならべて販売しているのがみかけられる。かれらが農民と聞いて、私は、関心をもつ請負制の実態、農村の変貌ぶりなどあれこれ質問した。するとかれらは、ではわが家に来ないか、百聞は一見にしかずだ、と熱心に誘ってくれた。こうした機会は滅多にないと考えた私は、意を決してその申し出を受けることにした。

われわれは途中の乾県というところで下車し、一時間ほどかけてその村に着いた。途中喉が乾くと、道端で西瓜を買ってジュース代りに食べながらであるから、のんびりしたものである。そのとき口にした西瓜の美味しかったことは、今でも忘れられない。

道々語ってくれたところでは、その一人は共産党員で、地区の責任者の経験もあった。土地は年齢に関係なく一人標準2ムー（約13a）が分配され、小麦とトウモロコシが主作物であるとのこと。生活ぶりを尋ねると、近年かなりよくなった。農民はいいぞ、春先と秋の農繁期を除けばあとはのんびり暮せる、と自信をもっていう。事実、各地で悠々と働く農民の姿をみたものだ。それにたいしてわが日本の農村の現状はどうか、私は考えこまざるをえなかった。

その村は戸数百戸余り、その八割は同姓、親族が近くにかたまるといふ、典型的な華北村落であった。各家の周囲には、この地方特有の冬の北風を避ける高さ3~4mの土塀、門を入ると前庭の奥に、一棟の寝室兼居間と倉庫と厨房とに区分けされた建物がある。厨房だけ別棟の場合もある。寝室兼居間にはオンドルが作られる。テレビなど電気製品はほとんどなかったが、

二人のうち一方は、今年新築したばかりで、約6千元かかったという。もう一人も来年初めの建換えを準備中であった。豊かになった農村の建築ブームはここにもおよんでいた。

家族を紹介してくれたが、一方の夫婦は幼な子三人で、他方は二人であった。政府の一人子政策との関係を問うと、このあたりは各家大抵2~3人の子供がいる、われわれ農民は自分の力で働き、規定額を納め、食べている、どこに問題があるか、との答が返ってきた。私はここに、一人子政策の浸透の難しさを知ると同時に、農民たちのしたたかさや楽天性をみる思いがした。かれらのそうした一面は、長い歴史の伝統から培われてきたものであろうか。

私はここで2時間ほど過した。かれらはこの遠来の客に、特別の手打ちの麵を作ってもてなしてくれた。お礼に写真を撮ってあげたいというと、女性たちは急ぎ着換えて現われる。近所の人まで私もお願いしたいと集まってくる。私の訪問は、この人びとに一つの話題を提供したようであった。

われわれは中国を語るとき、多くの場合、北京や上海の大都会を基準にする。だが今回の滞在で感じたのは、それはごく一部を代表するにすぎない、地方都市の大半はそれとは様相を異にし、さらに大きく隔たった八億人口を擁する農村が存在する、ということであった。そうした広い社会を忘れるならば、その理解も結局皮相のところまで終らざるをえない。したがって今後いかに広い視角から中国を捉えるか、それが私にとって重要な課題であると考えた次第である。

## ニューイングランドでの一年

教養部助教授 三原健一

州立のマサチューセッツ大学（以下UMassと略記）があるアマーストはボストンからハイウェイで2時間半程西に行った典型的な田舎の大学町である。何しろ学生を除く人口が2万程なのだから。UMassの他、ナンシー・レーガンの出たスミス・カレッジ、新島譲や内村鑑三で有名なアマースト・カレッジ等、四つのカレッジがあり、いずれも名門である。

私の専門であるGB理論と呼ばれる言語理論ではボストンのMITがその中心地となっているが、何故MITではなくてUMassを選んだかと言うといくつか理由が

ある。まずボストンはアメリカでも最も家賃の高いところで有名で、大幅に足が出るということが大きい。他にも私の滞在していた一年間、MITのチョムスキーがサバティカルで、彼のいないMITに行くことはクリープを入れないコーヒーと同じであるということや、UMassのトム・ローパーとはかねてからの友人であったということ等があげられる。しかし結果としては、UMassを選んで正解であった。何となく雰囲気暗いMITに比して、ラウンジと呼ばれているコーヒー・メイカーのある部屋での教授陣や大学院生

との議論や雑談はいつも暖かい色彩に包まれていた。10人いる教授陣がすべて「世界級」であることは言うまでもない。

さてニューイングランドと言えはすぐに「保守的」という言葉が頭に浮かぶが、これは正しい。行く前は、何しろあの清教徒の地なのだからプロテスタントの一大根拠地であろうと漠然と考えていたのだが、実際はカソリック人口のほうが多いことがわかった。おそらく後からやって来たアイルランド人の定着率のほうが高かったことによるのであろう。それとポーランド系の人やたらに多い。電話帳を見ると、あの子音が多くて発音しにくい名前がずらりと並んでいる。

住んでいたアパートから歩いて5分程の所にコーヒー・ショップがあって、ここで毎晩色々な音楽のライブが行われているので良く出かけたが、このあたりの人達の一番のお気に入りはおとなしいフォークかクラシックであるようだった。町のホールであったある南部の黒人演奏家のコンサート（ルイジアナのザディオコという音楽）で何ともへたくそなこの町の人達のダンスを目撃した時は「やはりニューイングランド人なのだ」と直感してしまったのだ。

大学町であるにもかかわらず奇抜な服装をした連中がほとんど見あたらない。イタリア系と思われる数人のパンクを時々見かけたが、彼等が場違いに浮いて見えるということはとりもおさず周りの風景がおとなしいものだからであろう。もっともこういった保守化の傾向はこの田舎町に限ったことではなくて全米的なものかもしれないが。

行ってすぐに気づいたことは、黒人が（学生を除いて）殆ど見当たらないということだった。これは何故だろうかと気に懸って調べてみて日常生活の中におけるアメリカの実態を見る思いがした。つまりこの町は低所得者が生活しにくいように住民税を意図的に高くしているのだ。確かにこの町は極めて安全である。夜中の3時に一人で歩いても危険な雰囲気も微塵も感じられない。私のように研究のために滞在しているものにとっては誠に好都合だ。しかしそれにもかかわらず、このような人工的な方法で安全を「買わ」な

ければならないという実態は、例えばニューヨークでナイフを突付けられて金を取られた友人の話よりもずっと心に沈澱してゆく。

この町は別世界だと言う人がいる。それも恐らく正しい。コネティカット川を越えてホリヨークの町を通り過ぎ、スプリング・フィールドに入ると町のあちこちに半分崩れ落ちてそのままになっている建物が見える。ニューヨークのハレムやウエスト・サイドで見ると同じだ。ただの食事にありつくためのウエルフェア・チケットを手に入れようとして列を作っている人達がいる。しかしこのニューイングランド全体、及び広大なアメリカの田舎地帯には、私が住んでいた町のような「別世界」が無数に存在するに違いない。アマーストだけが例外であるとは私にはとても思えないのである。

もっと明るい話題にするつもりで書き始めたのだが何となく暗めになってしまった。最後に多少後味を良くして終わることにしよう。

行く前に色々な人から言われていたのは、ニューイングランドの秋の美しさであった。記憶の中で美化されている風景だと思って、少し値引きしながら聞いていた私は、実際にこの目で見て息が詰まる程驚いたのだ。アパートの前から大学までバスに乗ると、その間の道は紅葉の名所のどまんなかを走っているようなものだ。しかも日本のそれのようにどこかに限られた領域が感じられるものとは異なり、永遠に紅葉が続いているかと思われるような広さの中をバスが走ってゆく。私はこの光景を絶対に忘れないだろうが、同時に見たことがない人にこの美しさを伝えることも絶対に出来ないだろうと思う。

その紅葉も過ぎるとニューイングランドの冬はすぐやって来る。クリスマスの頃にはコネティカット川に薄い氷が張るようになるのだが、ある日通りかかると、誰が置いたのかかなりの幅がある川のどまんかにクリスマス・ツリーがあった。その夜もう一度同じ所を通りかかると、何とそのツリーは山程の豆電球できらきらと輝いていたのであった。暇ではあるが粋なことをする人があるものだ。

## 富山の雪の総合研究

教養部教授 藤 井 昭 二

富山大学には全国唯一つの雪氷学講座が開設されている。56, 59豪雪に対して地学・地理学分野の研究者の協力の下に北陸の雪の特性について研究をすすめてきた。その成果の一部は「豪雪」（古今書院, 1982年）雑誌「地理」（1984年12月）に発表されている。また、1981-84年に開かれた一連の学会、シンポジウムで研究発表が行なわれ、その他、1985年10月に日本雪氷学会秋季大会が富山で開催されている。

歩行社会から車社会にかわり、雪問題は大きな社会問題として顕在化し、特に56豪雪以後にその傾向が強い。

1985年秋に「雪」についての公開講座を行なったのは「雪」になやむ地方に位置する大学をして、何か地元役に立てることをすこしでもやってみようということであった。公開講座に参加した教官を中心に上記テーマの研究が組織された。

56, 59豪雪が日本海沿岸を初め豪雪地帯の都市生活におよぼした雪害は極めて大きい。これを契機に富山大学でも各分野において、これまでにもまして雪の研究が本格的に取り組み始めた。

特に雪害の対策では雪質の地域特性を初め、自然、社会環境を十分に配慮しないで、太平洋岸の生活様式、都市づくりおよび産業政策が画一的に近年導入され、その見直しが強く迫られている。

本研究では富山に生活する研究者として、こうした問題点を各専門分野から検討すると共に、富山市を中心とする広域都市圏をモデルに設定して、これからの雪対策についての総合的な検討が行なわれようとしている。

この研究組織のメンバーは、これまでにも、それぞれ、富山の雪にかかわる技術的、科学的研究および行政機関のプロジェクトに関与してきた。しかし、このまゝでは個別分野における限界をもつことも否めないもので研究者間の討論を深めようというものである。

この研究の基礎になる雪質の地域特性については、今まで、寒冷地の乾き雪については調査された例は多いが、温暖積雪：べた雪についての調査研究はまだすくなく、未解決のことが多いが、乾き雪と異なった対

応をしないとイケないことだけ明らかである。特に雪片、同位体比の研究では、サンプル採取の難しさから、その形状、含水比、結晶状態、形成機構などが殆ど未解決のまゝのこされている。富山のような暖雪地帯は世界的に非常に限定されている。雪氷学講座が考案した雪片観察法による研究を同位体比の研究等と共同して行ない、地域に求められている雪対策に役立てようとする研究は世界に例をみない。

富山の雪の地域特性に見あった町づくりを必要としている。今までの研究を参考にしながら、富山の地域特徴、湿り雪にあった研究をすすめている。

研究課題は下記のように、富山の町の計画的整備という地域政策課題とも関連した基礎的、対策的な個々の研究からなっている。

基礎的研究・富山の雪の発生、移動、降雪機構とその特性の研究  
雪質、含水量、形状、結晶形  
積雪・融雪の研究  
水（雪）循環と土壌・植生  
対策的研究・交通、道路、軌道、都市間ネットワークと除排雪  
産業、アルミ等耐雪建材の開発、産業政策の適合性  
無雪害都市  
社会システムと雪国生活のルール

個人として次のような研究がなされている。

藤井昭二：ランドサット画像利用による北陸の積雪分布と融雪水の研究

対馬勝年・中川正之・川田邦夫：富山の積雪分布と雪質特性研究並びに雪片の研究

水谷義彦・佐竹洋：富山の雪の同位体比を支配する要因に関する研究

小島 覚：多雪が植生と土壌の発達に及ぼす影響に関する研究

多々静夫：富山県のアルミ産業と積雪の研究

中藤康俊：雪国富山における産業構造の研究

実 清隆：富山における雪と交通体系の研究

## 私の日本（富山）体験

外国人留学生大学院工学研究科

ロベルト・リバス・カストロ（ボリビア）

日本とボリビアの位置関係は、緯度も経度も真反対になります。日本は海に囲まれた国、一方ボリビアには海岸がありません。民族については、日本は単一であるのにくらべ、ボリビアは多民族国家です。インディオ系、ヨーロッパ系、アジア系、アフリカ系と様々な民族からなっています。日本は国家として1000年以上の歴史のある国です。ボリビアもインカ帝国の一部として栄えていましたが、植民地開拓者たちの蛮行によって滅ぼされました。現在は多人種混血の文化を持った国です。

両国をこのように比べますと、その違いは著しく、相互に理解しあうことがいかに難しいかわります。加えて、両国間の距離が、通信費を高くし、相互交流を困難なものにしています。

従って、日本に来る前の私にとって、日本とはどんな国なのか、はっきりつかむことができませんでした。来日前、私にとって日本とは、

- ・ ハイテクノロジーの国
- ・ 天然資源がない国ながら、主要な輸出国
- ・ 人口密度 513 / km<sup>2</sup> (ボリビア 9 / km<sup>2</sup>)
- ・ 世界で一番難しい言語の国（おそらく完全に日本語をマスターするのは不可能）
- ・ 一宗教（仏教？）文化の国で、神秘的、かつ理解できない文化をもつ国
- ・ 世界でもっとも発達した国のひとつ。一方、特別な日や式典の際には、何世紀も前から伝わる衣裳‘きもの’や‘ゆかた’を着る国
- ・ 第2次世界大戦敗戦で破壊されたのがたった40年前なのに、現在、世界で有数の経済力をもつに至った国

でした。

こんなイメージを持って、1985年4月5日に日本に来ました。その日から、名古屋で6ヶ月間の日本語集中コースで勉強しました。その間、ほとんど四六時中日本語ばかり勉強したにもかかわらず、その成果はさっぱりでした。というのは、日本語は本で学ぶことがで

きるものではないからです。毎日少しずつ、生活の中から学びとるのです。

1985年10月、富山に来ました。そしてここでやっと日本人の習慣と日本語を知ることができました。また、富山だけでなく、ほかのところを見る機会もありました。そこで、富山と他の都市、たとえば、東京、名古屋、大阪などとをくらべてみると、富山は小さい町です。重要な国際（空）港もありません。しかし、古い、伝統的な文化を維持しており、特に文化が極端に違う西欧人にとって、これはすばらしいことです。富山では、富山以外から来た人、特に外国人滞在者に対しては寛大な心をみせてくれます。私が日本の生活に順応できたのも、日本語が使えるようになったのも、富山の人のこの寛大な親切のおかげだと確信しています。

現在、富山大学工学部の大学院で勉強しています。授業は日本語です。又、参考書は英語のもの日本語のものを使っています。従って勉強はかなり大変です。でも、教授や学友のおしめない助力を受けて、学業は順調に進んでいます。

富山の天候は、私にとっては慣れないものです。夏は暑すぎるし、湿度も高い。夏の終わりには突然季節が変わり、紅葉の美しい秋になります。それからゆっくりゆっくり冬がやってきて、やがて雪が降ります。雪は珍しく、美しい。昨冬、雪をたっぷり楽しみました。クラスメートにスキーも教えてもらいました。しかし、やはり、雪のない国から来たわたしにとって、寒さはこたえます。（ボリビアは暑い国。冬でも気温は15度くらい）そして、暖かい風が吹き、春。美しい花の季節です。特に日本の自然美を代表するのが‘さくら’の花です。

私にとって、日本は、やはり、神秘的です。時々、ボリビアとは違いすぎるこの文化の中で、淋しくなることもあります。それよりは、もっともっと、日本のことを知りたいと思う気持ちの方が強いです。

日本を、本当に知るには、あと、どのくらい勉強したらいいでしょうか。

# 留 学 の 感 想

外国人留学生工学部（教養部）

李 東 盧（マレーシア）

私は今年の4月に富山大学に入学しました。その前に東京で1年余り日本語を勉強しました。友達数人と一緒に台湾の電子技術学校を卒業して、日本の先端電子技術を学びたいので来日しました。東京では学校の近所のアパートを友達と一緒に借りまして、自分達の共通語を話しますので、日本語の勉強はなかなか上手になれませんでした。しかし日常生活はお互いできますので故郷と遠く離れている淋しさはそんなに強くありませんでした。

富山大学に入学時、こちらの事は全然知りませんでした。大学の工学部や学生課や教養部等の皆様と先生方に親切な案内をしていただきまして、本当に心から感謝致します。

私の国マレーシアは熱帯雨林気候で、天然ゴムとスズの生産は世界的ですが、今発展の途中の国なので、先進国から勉強したい事が多いのです。面積は33.3万km<sup>2</sup>、人口は約千五百万人、人口構成は多種民族、中国人、マレー人、印度人など、言葉も色々あります。祭日は種族によって色々あります。最近外国の工場が建ち初めました。日本もその中の一つで、車の工場や電子製品の生産工場などです。

マレーシアは一年中夏なので四季の変化はありません。日本には、四季の変化がありますので、春夏秋冬の変化を初めて経験しました。とても面白いです。去年は、1年中東京で住みました。夏はマレーシアとあまり変わりませんが、湿度は日本の方が高いです。雪は東京では余り降りませんでしたが、これから四季がはっきりと分かれている北陸地方の冬を迎えます。先生方や友達の話しにより、北陸の雪の降る程度にはびっくりしました。これから、もう一つの新鮮な経験に向います。恐しい気持ちと楽しい気持ちが交っています。

私の印象では、日本の方々はとても優しく親切です。初めて日本に来た時の事を思い出します。其時は、まだ日本語は、単語を少ししか覚えていませんでした。友達を訪ねに行く時、道が分かりませんでした。友達の住所が書いてある紙で人に尋ねてみると、説明してくれるだけではありません。友達の家はそこから相当の距離があるのに、更に、車で友達の家まで乗せてくれました。それは感心な事でした。

日本は自動車や電気製品などを多く輸出していますから、私の国マレーシアはあちこち日本の製品がよく見られます。車は無論、電気製品は殆ど日本製です。今、日本のある自動車会社がマレーシアの新しく作られた自動車会社と合併して車を生産しています。

日本の工業、建築技術も高水準です。地震の多い所ですが、高層ビルが沢山建っています。東京にいる時、町に出たら、殆ど高層ビルしか見えませんでした。交通方面はとても発達しています。高速道路や鉄道などとても立派です。電車に乗ればとても便利です。地下鉄はとても立派に作られていると思います。地表から何十メートルの深さで工事するのはそんなに簡単ではありません。しかし日本の地下鉄はあちこち通っています。

初めて来た頃、日本料理の刺身や納豆などが食べられませんでした。刺身を見たら、なんとも気持ち悪い感じでした。2年近く日本で生活をしてきましたから、今は日本料理はなんでも食べられるようになりました。自分の慣れた食物の種類とは違いますけど、やはり日本に留学していますから、何とか日本人と同じような食事をしなければなりません。中国料理は口に合いませんけど、日本料理も嫌いではありません。今日本の生活もだいぶ慣れて来ました。

富山に来た頃、やはり東京と違います。留学生と一緒に生活していた頃と較べると、急に新しい環境に変わったので、知り合いの人はいませんし、何となく不安な感じでした。しかし大学方面の皆様や新しく知りあった日本人の友達が皆親切にしてくれるので、分からない所があったら、聞きに行けば、すぐ分かるまで教えてくれます。ですから不安な感じも次第になくなってしまいました。

この半年以来、教養部で教養課程の授業を受け、責任感のある先生方の親切な教え方や学生達の真面目な習い方など日本の教育をある程度理解しました。授業の他に学生達はサークルに入ったり、色々な課外活動をしているので、これこそは大学生の生活だと思いません。

日本の高水準の技術を速く学びたいなど思っています。来年の秋に皆と同じように専門課程に行けるように頑張ろうと思っています。

## 私の留學生活，私の先生たち

外国人留學生大学院人文科学研究科  
蘇 思 純（中国）

昭和59年の秋10月19日に、恩師の福井大学の黒坂満輝先生と師弟同伴で、中国の西安から上海経由、大阪にむけて、出発した。その時私の学校、西安外国語学院と福井大学とは姉妹校になる予定であった。

黒坂先生ご夫妻は昭和54年から55年までの2年間外国人教師としてわが学校で日本語を教えておられた。その時は中国政府が外国に対して解放政策をとったばかりの時期なので、黒坂先生ご夫妻はわが学校の最初の日本人教師であったし、われわれ日本語科の学生たちの最初の日本人の先生であった。その時、よく先生のお宅に呼ばれて、冷たいビールをごちそうになった。中国には、まだ冷蔵庫が少いため、冷たいビールを飲む経験がぜんぜんなかったから格別の味で今でも忘れ難い。その先生のおかげで、私は留學することができ、日本の土を踏んだのである。

実は西安外国語学院を卒業してから、日本に留學するまでは、その学校で助手、講師という仕事をしてきたが、その時には、日本語のレベルも、日本に関する知識も低いので、思い出してみれば、なんだか、その時、学生たちにおぼつかない日本語ばかり教えていた気もしてくる。

福井大学に来てから、日本文学の越野格先生について、日本近代文学の勉強を始めた。読書会に出たらメンバーの学生たちが何ページの話をしているのかも分からなくて、つらかった。越野先生がとても心配して、授業の前にいつも資料のコピーを沢山とってくれたりしてようやく助った。自分もだんだんやる気が出てきた。

もともとは、大学院に入って日本文学を勉強することなど考えてもいなかった。1年ぐらい日本で生活して、まあ、ある程度日本語だけうまくなれば中国に帰ろうと思っていたが、勉強というのは、なにか泥沼にでもはまり込むようなもので、なかなかそこから抜け出られないようである。

黒坂先生と越野先生の激励で、私も「よし！やってみよう。」と大学院に行く決心がついた。しかし、福井大学には大学院がないため、富山大学の中国文学の三宝政美先生に留學生募集のことについて打診したところ、富山大学には今年はじめて人文学部の大学院が出来たが、留學生も日本人の受験生と同じ試験を受けて、成

績によって受け入れることになっているという返事を得た。その時に、福井大学の先生たちからこう言われた。「がんばれよ、今度は失敗しないようにな！」と。実は、その前、金沢大学大学院の試験も受けたがみごと落ちてしまったのである。どうも私は北陸三県に未練があるようであった。

富山大学大学院の試験を受けた日の様子は今でもはっきり覚えている。北陸の天気は中国の大陸の天気とちがって、すぐ変わるもので、もう4月というのに、その日は雨と風がひどくて、手がふるえるほど寒かった。厚着をすれば、もっといい点数が取れたのにと、あとからよく言われた。

試験日の前の晩は富山駅の近くのワシントンホテルに泊った。食事の時にテーブルの上に置いてある日本占い協会の円いものに興味があって、百円玉を入れた。円いプラスチックの小さな玉がころんで出た。それをあけて見ると別に大したことも書いてないが、自分のラッキーナンバーだけを覚えた。部屋について見たら、おもしろいことには、そのナンバーは、部屋番号と一致した。試験は無事に合格した。

4月の末に入学したが、普段より1ヶ月ほどおそかったので、下宿さがしに大変であった。いいなと思ったら、家賃もいい。安いなと思ったら、まるで芥川の「羅生門」みたいであった。三宝先生は私をつれて、2時間もかかって、いろんな所をまわって探してくれた。やっと今の所が見つかった。先生に対して、なんともいいようなない感謝の気持ちでいっぱいであった。

富山大学は金沢大と較べて、登ったり降りたりする地形がなく、福井大と較べて、建物をななめに建てたりなんかはしない。道がまっすぐで、各学部の建物はその両側にきちんと並んでいる。とくに正門から入ると、2列の並木があって、わりと中国の大学と似て、私にとってとてもなつかしい気もする。学部の学生たちは案外スポーツが好きで、体を動かすのがめんどくさい私は、困ることがある。ソフトボールに行こうよと誘われると、いつもかんべんしてくれと頼むのである。

富山大学での生活はあっという間に、もう半年ほど経ってしまった。北陸にいた2年の間に、ほとんど病氣一つもしなかった。湿気の多い気候にあうのかもしれない。ただ心配しているのは勉強のことだけである。

中国にいた時には、ただ日本文学に興味があるだけだったが、いきなり日本文学の研究の世界に入ると、本当にむずかしくて、理解に苦しむことが沢山ある。今は、人文学部の日本近代文学の山口幸祐先生の指導の下で勉強している。先生はとても親切で、私のことをいろいろ心配して、授業の時間割表までつくってくれた。そのかわりにほとんど毎週レポートをしなければならぬ。とてもきびしい先生でもある。

日本での勉強が終わったら、やはり、中国のもとの学校にもどって、日本文学の教師になりたいと思っている。将来少しでも日本の文学、日本に関する事、及び日本の先生たちのことを中国の学生たちに伝え、理解してもらうのは私の夢である。そのために、これから、もっとがんばるつもりです。皆さん、どうか、よろしくお願いします。(1986.11.15記)

## ◇◇◇ 学 部 だ よ り ◇◇◇

### ◆ 人 文 学 部

#### 中部哲学会開かれる

10月3日(金)の午後から4日(土)の午前にかけて、中部哲学会昭和61年度大会が本学の人文学部で開催された。中部哲学会は日本哲学会の地方版である。本学での開催は二度目である。会員数は約150名であるが、学会参加者はそう多くはない。50名ほどである。

10月の初旬は天候にもめぐまれ、立山の雄姿が望まれると期待していたが、1日目の夕刻から雨。翌日は晴れたが立山は雲の中にあった。大方の参加者は北陸の変り易く、どんよりとした天候を改めて確認させられただけであったようで、土曜の午後から観光に出かけるものも少なく、そそくさと帰路についたようであった。

第1日目は研究発表、2日目がシンポジウム、というのが恒例のプログラムで、今回は研究発表が4本、シンポジウムは「真理について」であった。研究発表は1人50分の持時間、シンポジウムは(提題者3名)3時間である。しかし議論は仲々深まらず、質疑応答の段階で時間切れという態のものであった。200人ほど収容できる大教室であったせいもあろうか。

懇親会は人文学部の会議室で、ここは人数からすると少々狭かったが、あちこちで話がはずんだ。はずんだというより議論や談笑の渦と化していた。酒は哲学者の心をも開くものなのだ。「酒中真あり」とはよくいったものである。(中本昌年記)

#### 中部英文学会開かれる

昭和61年10月4日(土)日本英文学会中部地方支部第39回大会が、本学人文学部及び教養部の校舎を会場として開催された。中部8県に在住する英語学と英米文学関係者で組織されるこの学会は、毎年秋に各県回り持ちで集會を持つことを恒例としている。富山での前回の開催は昭和52年であった。

参加者は会員と一般聴講者合わせて約250名。支部長の名大・川崎先生の開会の辞で幕を開け、午前中は、5会場で19(英語学関係5件、英文学関係10件、アメリカ文学関係4件)の研究発表が行われた。

午後には『英語教育とコミュニケーション』、『海と文学』と題するシンポジウムが持たれた。いずれも、司会・講師ともに本学教官の担当で行なわれたが、こ

ういった大会が各地域で回り持ちされることに、新しい意義付けがなされたと評価されている。

引き続き、東京大学教授平川祐弘先生による特別講演『ハーンに於ける母性回帰』を聞いた。平川先生はハーンが妻のセツコに宛てた手紙に窺われる濃やかな愛情を手掛かりとして、ハーンの伝記的事実を援用しながら彼の女性に対する思いを解明された。その証しの一例として、彼がアメリカ時代に著した『中国怪談集』の「孟沂のはなし」にみられる女性描写が原典と如何に相違しているかを詳細に吟味され、その間の相違点にこそハーンが女性・母性に抱いている憧憬を探る鍵があると示唆された。この比較文学・比較文化的観点からの斬新で興味溢れる話は聴衆に多大の感銘を

与えた。なおこの原典が本学「へるん文庫」所蔵のフランス語本であることも披露された。

懇親会には50名を越える参加者があり、和気あいの裡に大会で発表された様々な話題を巡って活発なやり取りが交わされ、極めて有意義であった。

この大会開催にあたり教官及び事務官の関係の方々から多大の援助を賜ったことに厚くお礼申しあげたい。最後になったが、富山県・富山市からも助成金の交付を受けたことを記して、感謝の言葉に代えたい。

(平田純, 記)

## ◆ 教育学部

### 昭和 61 年度教員養成課程合宿研修を終えて

実行委員長 筏井 弘毅

「光陰矢の如し」と言いますが、教員養成学部学生合宿研修(秋季)の実行委員長として企画・運営を行ってからはや2ヶ月が過ぎました。この合宿研修は、単位等に関係なく学生の自主自学の精神を基盤に4つの目的がその柱とされています。その目的は、

- (1)教育学部における教育内容をより充実すること。
- (2)集団的な教育的諸活動の指導力を身につけること。
- (3)共同生活による相互啓発と連帯感の育成を図り、相互の親睦を深めること。
- (4)豊かな人間性の形成に寄与し、資質の優れた教員の養成を図ること。

でした。今振り返ってみると様々な反省点が心に浮びますが、その反省も含めながらこれらの目的が達成されたかどうか、特に(1)と(4)の目的に焦点をあて振り返ってみたいと思います。

- (1)教育学部における教育内容をより充実すること。

今回、企画・運営も含めこの野外研修を自主的に行うということは、日頃の大学での教材研究に留まらない多くのことを学ぶという点で、非常に意義があるものだと思います。しかし、私達企画委員にとっては、“日頃大学では学ぶことができないもの”であるだけに企画頭初から戸惑いの色は隠せませんでした。「一体何をすればいいのか。」二回に渡る打ち合わせも暗中模索のまま、結局はほぼ昨年を踏襲する形となってしまったのです。企画内容を決めていく段階でも、私を含め企画委員一人一人が目的を把握していなかったことや、自分達の手で作り上げていこうという気持ちが薄かったこともあり、ただ徒らに日を費やしていくばかりでした。このような状態で8月上旬、初めての下見が行われました。実際に、立山少年自然の家を目の前にし、各委員の心の中に緊張感と同時に「よし、やってやるぞ」という気持ちがみなぎってきました。

これを転機としてその後、何回かの下見、幾度とない話し合いを重ね、当日を迎えることとなったのです。

研修内容は、オリエンテーリング、座談会、クラフト、テント研修、野外炊飯、キャンプファイヤー、登山。どの研修においても、学生一人一人が自主的に、活発に活動し、特にクラフトでは、同宿していた小学生の参加もあって「子どもたちと一緒に。」と大変な盛り上がりを見せました。

このように、研修を実際に行うことを通じて、とかく子どもに研修をさせ、それを見ているだけの教師が多い中で、子どもと一緒に活動をしながら子どもたちを見守ってあげられる教師になる下地を、一人一人が作っていったように思います。

以上のように、「教育内容をより充実する」という目的は、参加学生の自主性に支えられて、十分達成されたと思います。

- (4)豊かな人間性の形成に寄与し、資質の優れた教員の養成を図ること。

ここでは、研修の一つである座談会に焦点をあててみていきたいと思います。

今回の座談会では、各分科会ごとに決めた「教師となるために」、「結婚・恋愛について」、「現代の大学生」等、様々なテーマについて話し合うという形をとりました。「教員養成学部合宿研修」ということを考えたならば、「“教育”をテーマとした座談会」にするという方法もあると思います。しかし、教師になるのだから教育について話し合えばよいというのではなく、もっと根底にある“人間性を磨く”ということに重点を置いての話し合いが必要なのではないかと。直接子どもたちに接する一人の人間としての「教師の人間性」というものが大事なのではないかと考えてなりません。

座談会の各分科会でも、理想の教師像、女子学生には切実な問題である結婚した時に教職を続けるか否か、等について様々な意見が活発に出されました。その中で、各人が色々なことを考えることができたのではないのでしょうか。この「考える」ということが、豊かな人間性、資質の優れた教員の養成の一助になったのではないかと思います。

今回の合宿研修を通して、私自身、人の上に立つことの難しさ、自分の力量のなさを痛感させられました。しかし、合宿研修を終えた自分を見てみると、一回り

大きくなったような気がします。この研修に参加した学生が、将来教師として子どもたちと触れ合う時、この体験を生かしてほしいと思います。今後、この合宿研修がより良いものとなることを願ってやみません。

最後になりましたが、至らない私達を陰ながら暖い目で見守り、御指導下さった立山少年自然の家の職員の皆様、学部補導委員及び参加下さった教官の方々、事務職員の方々に深く感謝しペンを置くこととします。

## 教育実習を終えて

教育学部4年 今井真理子

教育実習が終わった。昨年は富大附属小学校で15.5日間であった。そして今年は、堀川小学校で14.5日、和合中学校で7.5日と、期間も内容もより充実した実習となった。

昨年は、すべてが初めての経験であり、その日その日を子どもたちと過ごすことだけで精一杯で、授業のための準備がおざなりになりがちであった。そうした反省から、今年の実習では、自分でできる限りの準備をすることを第1の目標として臨んだ。

今年の小学校実習では、3年生を担当した。授業や事後反省会を通して、子どもたちの発達段階から、授業中の発問、板書の方法に及ぶまで、担当教官が丁寧に指導して下さった。その中でも、よく話題になったことは、まず子どもの発言をきいたら、それを教師がしっかり読むことが大切であるということだった。そうすれば、他の子どもが、その発言のどこに関わってくるかを予測できるはずである。子どもが、どこを不思議に思うのかを常に予測しながら、授業を展開するのだということを教えられた。そのためには、教師も常に考え、子どもの発言を「こうなのね。」と復唱などしないこと、わからない時には、発言者にききなおすのではなく他の子どもにきいてみることで、他の子どもたちがどう聞いているのかを絶えずおさえること、などが大切であることも学んだ。とかく、その時間の目標を教師が定めたら、そのために都合のよい意見だけを取り入れて授業をしてしまいがちになるが、子どもたちの意見にこだわる気持ちも忘れてはならないと感じた。

公開授業では、私が子どもたちの意見を大切にしよ

うとしたあまりに、音楽的活動よりも話し合い中心となった。その中で子ども同士の感情がぶつかりあって、とんでもない時間になってしまった。ただ意見を取り出すだけで、どこに関わってくるかまで予測しきれなかったためだと思う。他にも、自分に欠けている部分や教材研究の不備な点など、解釈の視点がたくさんあり得るところの多い授業となった。子どもたち自身の感想を読んでも、けんかになってうるさいだけだったという子から、けんかする程のことはなく、認め合うべきだという子や、〇〇君たちは自分の意見をしっかりとっていてすごいという子など、受け取り方も様々であった。なにか、大変貴重な体験をさせていただいたように思う。

小学校では、音楽はみんなが楽しみにしている授業の1つであった。しかし、中学では息抜きの場と考える子はまだ良い方で、「受験に関係ないもん」で片づけてしまう子も多い。そんな生徒にいかに関心をもたせるかが問題であった。この時期、ちょうど合唱コンクールという行事のため、クラスがまとまろうとしている姿勢も見られた。関心をもつことがあれば、必ず子どもたちは意欲を見せる。教科の中だけでなく、他行事とも関連させて授業に取り入れることも大切だと思った。

また、折角子どもたちが関心もち、やる気をみせても、教師の技術や教材研究が足りないと、その気持ちを維持させることはできない。私自身、短い中学校実習の期間の中で、精一杯伴奏の練習や教材の準備などをしたつもりだが、子どもの要求に応じきれない場面がたくさんあった。子どもたちの意欲にこたえられ

る力をつけておくことは、当たり前のように重要なことであると思った。

また、教師の仕事の内容も、小学校と中学校では大きく違っている。一見、中学校の先生は空き時間もあり、研究時間を多くもてるように思える。しかし、中学校の校長は、「本当の仕事というのは、人間を育てることだ。教科以外に書類整理、環境整備などもあり、一番大変なのは生徒指導である。」とおっしゃった。私たちは、教師という仕事の中の一面しか、まだ経験していないわけである。放課後、遅くまで相談室で生徒と語り合っている先生方の姿を見て、それを痛感し

た。そして、教師の仕事の重さについて考えるよい契機ともなった。

これらの経験を通して、私は毎日感動していた。大学では、教科の分析と子どもの反応の予想を頭の中でだけ考えることになる。しかし、教育実習では、実際に子どもたちのなまの活動があり、それを基に教材研究ができた。教材研究は、子どもたちと離れたことを研究するのではなく、子どもの実態を細かく調べることから始めなければ意味がないことも実感できた。実際にそのようにできるというわけにはいかないが、今年の教育実習は大変意味深いものにできたと思う。

## 教育学部附属教育実践研究指導センターの 課題と現状

教育実践研究指導センター長  
教育学部教授 藤井敏孝

教育学部の附属教育実践研究指導センターは、設置以来すでに5年を経過し、現在全国の教育大学(学部)は、その3分2以上が上記のセンター名称の外種々の名称のセンターを設置し、したがってその性格は必ずしも各大学(学部)によって一様でない。

当学部のセンターは、教育実践に関する理論的、実践的研究及び指導を行うとあり、学校における教育実践の理論的・実践的研究と指導、教育実地研究(実習)の改善開発の研究と指導及び教材・教具の開発研究と指導が主要な目的となっている。これを要するに、教師行動の研究とその訓練プログラムの開発と、その成果による指導であると云ってよい。

元来教育学部は、義務教育学校の教師養成教育をその実質的目的としているが、学部それ自体が教師教育そのものを研究対象とする使命をもっている。他の専門職業教育を目的とする学部が、そのための研究・指導センターを持たず、また欧米先進諸国の教員養成教育の機関が、わが国の如くかゝるセンターを一様に設置している例は必ずしも多くない現状からみて、最近の臨教審の答申内容にも見られる如く、また欧米先進

諸国の教師教育の改善策にも呼応して、義務教育の内実的方面における発展施策に答えようとする意図に発していると云ってよい。

学校の教育実践、そしてまた教師行動は、極めて多様な要素から成立し、例えば授業の展開、生徒指導や学級経営という教師の行動は、その一般化と個性化・理論と実践の総合ということにおいて、極めて多様にして複雑な次元と要素から成り立っている。古来一般化と教育的タクトの総合として指摘されてきた領域である。したがって教師行動の訓練は、理論的基底と云わば臨床的訓練による実践的訓練を総合することにある。

かゝる意味で、最近顕著な発達をなしつゝある教育工学、コンピュータの活用や教育情報科学の成果を活用しながら、教授スキルもの開発、教職教養プログラムと教育実地教育の研究などを通して、教師養成教育の理論的、実践的研究を行い、またその成果を実践的指導に活用し、学部のもつ課題の一拠点としての使命を果しつゝある。

## 1986年度日本地球化学会年会を終えて

理学部教授 水谷 義彦

本学理学部2号館講義室において、10月11日から13日の3日間に上記の研究発表会が開催された。同年会は日本地球化学会が主催し、日本化学会が共催するもので、地球の大気、水、生物、岩石、そして地球外物質に関する化学元素の分布と移動の研究、さらに、その応用である環境問題および災害予知の化学的研究などの地学と化学の境界領域の研究に従事する者が一堂に会して研究発表および討論を行なう会である。なお、日本地球化学会年会が北陸地方で開催されたのは1966年に金沢大学で開かれて以来のことであった。

初日はチェルノブイリ原発事故によって放出された放射性元素の日本への降下をはじめ、大気、降水、岩石、鉱床、温泉、地球外物質に関する90件の一般講演が行なわれた。2日目は金沢大学阪上正信教授および富山大学佐竹洋助教授をコンピーナーとして「環境における放射性および安定同位体の動態」をテーマとした課題講演が行なわれ、13件の研究発表があったほか、一般講演としてカメルーンガス事故の調査報告をはじめ、火山ガス、地震、岩石、年代測定などに関する56件の研究発表があった。そして、それらの発表終了後、アカンソー大学黒田和夫教授の「核地球化学1936-1986」と題する招待講演があり、黒田教授の長年にわたるアメリカでの研究生活の苦勞とその成果が、歌舞伎の場面になぞらえたユーモアあふれる表現で話され、核地球化学を専門としない人達にも、50分間の講演時間を短かく感じさせた程の興味と感銘を与えた。つづいて総会が開かれ、さらに総会終了後には学生会館大集会室において懇親会が開かれた。参加者は220名もあり、生協食堂部が準備した山海の珍味は会費の額以上の内容であるとの好評を得た。そして最終日には、海洋、陸水、岩石-水反応、環境に関する62件の研究発表が行なわれた。なお、この3日間の期間中6件のポスター発表が理学部2号館教養部301講義室で行なわれ、最終日には、それに関する討論も行なわれた。

上記の3日間における研究発表総数は227件、うち富山大学からの発表は3件、参加者数は、全国の国公立大学および研究所などの研究者を主体として約350名であった。これは、関連学会との会期の重複などの不利な条件があったにもかかわらず、昨年の筑波における同年会と同様の規模であった。そのため講演会

場となった理学部2号館の理学部第4、7、9および10番講義室は、時には場外に人があふれる程の盛況であった。特にチェルノブイリ原発事故関係の研究発表やカメルーンガス事故調査報告などは、タイムリーな話題として大勢のマスコミ関係者の注目を集め、熱心な取材が行なわれた。そのため満員の会場は一層狭くなり、会の進行に支障を生じるのではないかと心配された場面もあった。しかし、各会場とも幸に大きな支障もなく会は進行し、活発な意見の交換と討論が行なわれ全日程を成功裡に終了することができた。

本年会の開催にあたっては富山県および富山市から多くのご援助を頂いた。そして会場の準備には本学事務局の方々、特に理学部事務部の方々から数々のご理解とご協力をいただいたことに厚く感謝したい。また、30人近い理学部地球科学科の卒業生および学生諸君が、会場係として、会の円滑な運営に努力してくれたことも記しておきたい。

つぎに若干の感想を述べて報告をおわりたい。まず、全く意外だったことは、大部分の参加者が宿をとった富山駅前から西町にかけてのビジネスホテルと大学間の交通の便の良さである。これは市内電車の珍らしさもあって、大変好評であった。確かに地方大学で学会が開かれる場合、宿と会場間の交通は不便なことが多い。その点では、富山大学は大変恵まれた立地条件を備えていることを改めて認識した。学内の会場設備を充実して各種学会の研究発表会を積極的に誘致するのも、本学の活性化の一つの方策として有効ではないだろうか。そして、印象に残ったことは、本年会の準備中に多くの人達から「地球化学とはどのような学問か？」と尋ねられたことである。これは、日本地球化学会年会が富山で開かれたのは初めてということも原因の一つと思われるが、県内はもちろん学内においても、地球化学という学問があまり知られていないことを示している。従って、今回の研究発表会は、地球化学が我々の日常生活に身近な問題を研究していることを多くの人達に知らせる良い機会となったことは間違いない。最後に、ただ一つ残念だったことは、多くの参加者がその美しい姿を望むことを期待していた立山連峰がしぐれ雲に隠れて全く姿を見せなかったことである。

## 高分子学会北陸支部研究発表講演会について

工学部教授 広岡 脩 二

新潟から福井までの4県にある大学・短大・工業高専及び企業等の関係者で構成される高分子学会北陸支部主催の第35回研究発表・講演会（10月9日）及び第8回若手研究会（10月8日午後）がそれぞれ富山大学工学部及び富山市内の銀嶺荘において開催された。前者では高分子化合物の主として合成、物性及び利用に関する47件の研究発表が当支部及びその他全国からの研究者により行なわれた。その後、旭硝子㈱研究開発部の山辺氏及び名古屋大工学部の野田教授による2件の招待講演があった。4県持廻りで毎年開催の当大会としては今回初めて1会場増のA、B、C3会場を併列に使用し、延約300名参加の盛会となった。

又、後者では上記研究発表会の前座的意義も兼ねて、野田教授及び、高分子研究奨励金（北陸支部）を前年受領した長岡技科大の手塚教官による2件の「分子の立場から見た高分子材料」についての講演を基にして、泊り込みで活発な討論が行なわれた。この会も予定の収容定員を遙かに上廻る約70名が参加した。最近、各種の学会では若手研究会を催すことが盛んになって来たが、高分子学会は早くから実施して来ており、当支部でも既に8回を迎えた。

さて石器、鉄器の両時代に続いて軽金属の登場を経た人類の利器の歴史に、戦後は新たにプラスチックが導入された。昨今はいわゆる軽薄短小の時代を迎え、天然産の物とは異なる特徴を備えた各種の合成高分子化合物の目覚ましい発展と普及は、一般人の生活や工業材料面に浸透すると共に、ハイテク時代の要請にも応え、セラミックと共に特殊な機能を備えた高分子化合物が新素材として競って開発されている。絹よりも、くもの糸よりも、鉄よりもすぐれているとして登場したナイロンで始まった合成高分子化合物については、理論よりも応用が先行する嫌いが無きにしも非ずであるが、学会活動を通じてバランスのとれた理論：応用両面の発展に貢献したいものと考えている。

最後に此の度の開催に当り、世話に当たった工学部工業化学科島崎、広岡、教育学部の竹内の3人は、御協力と御配慮を賜った多数の教官、学生並びに事務局の諸氏の他、富山県及び富山市を初め多くの富山県内関連企業より御援助を頂いて、大過なく実施できたことに厚く感謝致します共に、「高分子」に高い関心と深い理解を持つ人の増加することを期待します。

## 化学工学協会・北陸大会講演会を終えて

工学部化学工学科

去る7月17日、18日の両日、化学工学協会関西支部の北陸地方大会が一般研究発表ならびにセミナー「コンピューター時代のプラント・オペレーションー省力化・防災・保全教育ー」および「微粒子を含むガスのクリーン化技術ー高濃度クリーンルームまでー」をテーマに、本学工学部構内を中心におこなわれた。北陸地方としては5年ぶりの支部行事であり、とりわけ今回は工学部の永年の念願であった五福統合がかなえられて、完成した新学舎の披露もあり、教室員一同、実行委員として万全を期したといっても過言ではなからう。実行委員には、ほかに北陸化学工学懇話会の当番会社から2名、おなじく金沢大から2名の協力をえた。

最近の関東支部はじめ各支部の地方大会では、従来

の一般研究発表に加えて、時宜をえたテーマのセミナーでひろく業界からの参加も呼びかけて成功する場合が多く、本大会でも、協会の研究会グループの地元メンバーから提案された冒頭の二つのセミナーを用意した。さらに特別講演として、学術会議会員で富山高専校長の桐栄良三氏に“乾燥操作の進歩についてー凍結、噴霧、攪拌伝導乾燥ー”を、協会会長で京都大学教授の高松武一郎氏に“21世紀へ向けてのプロセスシステム工学の夢”をそれぞれお願いし、また、展望講演には、本学の若林教授に“防災・生産技術に対する執念”ならびに三菱電機㈱LSI研、福本グループリーダに“ユーザーが求めるクリーン化技術について”の2件を予定した。

さて、このような企画の甲斐があったのか、参加者は当日登録を含め300余名で、北は北海道から南は鹿児島まで、全国各地から集まってくることが出来た。なお、予約登録者250名の中には、地元はじめ、近隣府県の業界から110名の参加者がみられ、前回よりかなり広い層の研究者、技術者の関心がえられたようである。また発表の応募件数も予定を大巾に上回り、一般研究発表が主として大学関係で75件、セミナーが業界、大学関係あわせて26件あり、大会を盛りあげていただいた。

初日は前日までの梅雨空がからりと晴れて早朝から出足もよく、時間的にはかなりハードな、プログラムであったが、ほぼ予定通り特別講演、一般研究発表をすませた。各会場とも予定時間をオーバーする活発な質問のやりとりがあり、坐長も進行にやきもきする具合であった。夜の懇親会は北陸化学工学懇話会のきもたりに第一ホテルでおこなわれ、学長、学部長にも出席ねがってにぎやかであった。二日目は全日、二会場セミナーがあり、両会場とも業界からの出席者が熱

心に聴講されていたようで、満席の盛況であった。業界と大学関係の問題意識のずれが質疑応答のはしばしにうかがわれたが、これもまたいい勉強をさせていただいた。

会場には、借用手続きの関係で、年度がわり早々、いずれもOHPを使用するので是非冷房入りということで、大会議室、化学工学科、機械工学科各会議室の三会場を予約しておいた。当日は特別講演、セミナー各会場を中心に聴講者がふくれ上り、特別講演会場では130名余りの熱気で冷房がきかなくなったり、セミナー会場では坐席が足りず、折畳み椅子を急ぎ補充するなど、予想外の満員盛況であった。しかしこの大会を通じて、夏休み中でありながら、ひろい講義教棟に会場をまとめてとることが出来なかったことは何としても残念であった。

おわりに、大会2日間にわたり、多くの方々いろんなお世話をねがい、またご迷惑をおかけしたことと思います。教室員一同改めて心からお礼とお詫びを申し上げます。(文責・教授 田中久弥)

## ◇◇◇ 学 年 部 だ よ り ◇◇◇

### ☒ 体育系サークルリーダー研修会について

本年度の研修会は、2泊3日の日程で山野スポーツセンターにおいて、下記のとおり実施され、各サークル代表者が参加し、熱心な討論を重ね有意義に終了することができましたことを報告するとともに、ここにあらためて関係各位に感謝いたします。

なお、今年度も昨年度と同様に、学外講師を招いて講演を行いました。

#### ◎実施概要

期日 昭和61年10月1日(水)～3日(金)  
(2泊3日)  
場所 富山県体育協会 山野スポーツセンター  
(富山県上新川郡大山町本宮)  
参加者 体育会役員及び体育会所属サークルのリーダー 73名  
講師 稲垣保彦(教養部教授)  
大川信行(教養部講師)  
他3名

#### 研究項目

ークラブにおけるリーダーシップー  
分科会Ⅰ「クラブ活動の現状と問題点」  
分科会Ⅱ「クラブ活動の問題点の解決策」  
分科会Ⅲ「良きリーダーになるために」  
講演等 “スポーツ傷害と応急処置について”  
富山市民病院救急医療部主任  
部長(スポーツドクター) 山野清俊  
“企業におけるリーダー像について”  
日本海電側々 顧問 白川昭称  
“リーダーのあり方について”  
雄山高校教諭 山中 茂  
“活力ある人間とスポーツ”  
教養部教授 稲垣保彦  
“新トレーニング研究(講義)(実習)”  
教養部講師 大川信行



(講演風景)



(分科会)

## 「明日の体育会クラブのために」

実行委員長 五十里 勘 司

体育系サークルリーダー研修会（以下、リー研と略する。）は、その目的を、「課外活動のあり方や問題点について、分析・検討しリーダーとしての資質の向上を図りあわせてサークル相互の理解と親睦を図る。」として、毎年学生部と体育会が行なっています。

今年も、昨年に続いて大山町の山野スポーツセンターに於て、10月1日(水)～10月3日(金)の2泊3日の日程で行ないました。今回のリー研は、特に研修会を終えて参加者に確固たるリーダーシップを持ってもらうことを目的とし、クラブに存在するあらゆる問題に対処し得る能力を身につけてもらうことを目指しました。そのために、予めクラブに対して行なったアンケートから抽出した、クラブに実存する問題で事例を作り、それを分析・検討するという事例研究を取り入れました。さらに講演と討論会に密接なつながりを持たせるため、リーダーシップというテーマを持つ講演を二つ用意するなどしました。然しながら、全クラブに参加を呼びかけたにもかかわらず、28クラブ55名の参加に終わりました。これには、教育学部のオリエンテーションなどが重なったことも原因であると思われます。

さて、討論会ですが、有効に討論を進めるため、参加者を5つのグループに分けて、テーマを「クラブの問題点とその解決」として行ないました。事例研究は今回初めて取り入れたため、こちらの経験、研究不足で、その効果を100%引き出すには至りませんでした。それでも、討論自体は活発で、議事進行を司さどる議長たちも思わず身を乗り出すほどでした。

講演は学外から三氏を招いて行ないました。まず、

富山市民病院の山野先生に「スポーツ傷害とその応急処置」という題でスポーツ中に起きやすい怪我や故障の応急処置についての話、日本海電測社の白川氏に「企業の中のリーダー像」という題で、企業のリーダーの分類、特徴そしてスポーツとのつながり、そして、雄山高校教諭の山中先生に「チームにおけるリーダーのあり方」という題で、氏の経験から発見したリーダー像をそれぞれ講演していただきました。

講義は学内から二氏を招いて行ないました。まず、体育教官の稲垣先生に「活力ある人間とスポーツ」という題で自然と人間とスポーツのつながりを、教養部講師の大川先生には「新トレーニング法研究」という題でウェイトトレーニングについての正しい知識と方法を、理論と実技を合わせて、それぞれ講義していただきました。

全ての講演・講義、討論会の終わった夜、クラブ相互及び、体育会とクラブの親睦を図るため自由交歓を行ない、明日の体育会クラブのために語り合い、歌いました。

こうして、リーダー研修会は終わりましたが、人間とは時としていい加減なもので、熱い感動もほほを伝う涙も、時間の経過とともに忘れてしまうものです。リーダー研修会の参加者の皆さんには、この研修会で得たものを忘れないようにして、明日の体育会クラブの発展と前進のために生かして欲しいものです。

最後に、この研修会を行なうにあたって、ご尽力して頂いた学生部、体育教官の方々に感謝をして、挨拶と換えさせていただきます。

## ☒ 昭和 61 年度後学期専門移行者調

( 61.10.1 付 )

学部	入学年度 学 科	専門教育課程移行者数					移行不許 可者数	移行対象 者数
		56	57	58	59	60		
人 文	人 文 学 科			2	1	78	13	94
	語 学 文 学 科				1	75	5	81
	計			2	2	153	18	175
教 育	小学校教員養成課程				1	139	1	141
	中学校教員養成課程			1	2	47	5	55
	養護学校教員養成課程					20		20
	幼稚園教員養成課程					30		30
	計			1	3	236	6	246
経 済	経 済 学 科				4	97	33	13
	経 営 学 科			2	9	84	47	142
	経 営 法 学 科				2	45	23	70
	計			2	15	226	103	346
理 工	数 学 学 科					33	15	48
	物 理 学 科			3	3	30	16	52
	化 学 学 科				2	30	13	45
	生 物 学 科				2	26	5	33
	地 球 科 学 科			1	5	23	13	42
	計			4	12	142	62	220
	電 気 工 学 科			2	2	41	13	58
	工 業 化 学 科				1	29	21	51
	金 属 工 学 科		1	1	1	27	22	52
	機 械 工 学 科	1		1	6	40	15	63
	生 産 機 械 工 学 科				1	30	21	52
	化 学 工 学 科				1	29	20	50
	電 子 工 学 科			1	2	29	13	45
計	1	1	5	14	225	125	371	
合 計		1	1	14	46	982	314	1,358

## 昭和 61 年度後期授業料免除について

昭和61年度後期授業料の免除については、さきに開催の授業料等減免選考委員会の選考を経て、出願者 601 名 (学部 548 名, 大学院 52 名, 専攻科 1 名) のうち、479 名 (学部 435 名, 大学院 44 名) が全額免除, 33 名 (学部 25 名, 大学院 7 名, 専攻科 1 名) が半額免除を許可された。

なお、授業料免除及び奨学金を希望する者で、不明な点は、厚生課奨学係又は各学部の学務係 (教養部は学生係) に良く相談して下さい。

### (参考) 前期授業料免除実施状況

区 分	出 願 者	許 可 者	不 許 可 者
学 部	537 名	461 名 (26)	76 名
大 学 院	53	49 (5)	4
専 攻 科	1	1 (1)	0
計	591	511 (32)	80

( )は半免で内数

## 授業料免除の収入限度額について

授業料免除は「経済的な理由によって納付が困難であり、かつ、学業優秀と認められる場合」に許可されることになっています。

授業料免除を受けることのできる「世帯の年間収入総額」は、所得の種類、世帯の構成、通学形態が異なるので一概には言えませんが、例えば、給与所得者世帯で自宅通学者の場合は次表の金額程度以下になります。

なお、自宅外通学者の場合は、下記の金額に37万円を加算した額以下になります。

(例) 4人世帯-両親・本人・公立高校生  
5人世帯-両親・本人・公立高校生・中学生

級 地	世 帯	収入金額
A 級 地 (大 都 市 等)	4人世帯	560万円
	5人世帯	614万円
B 級 地 (A級地以外)	4人世帯	545万円
	5人世帯	598万円

(注) 級地の区分は学資負担者の住所によるものです。  
詳細は学務係へ問い合わせ下さい。

## 昭和61年度学生健康保険組合予算及び 昭和60年度学生健康保険組合決算について

標記について、去る10月16日の理事会において、下記のとおり承認されました。

### 1. 昭和61年度学生健康保険組合予算

<預り金>

収 入 の 部		支 出 の 部	
繰越預り金	6,839,700円	運営費へ繰入金	4,986,400円
新入生等組合費	6,930,100円	返 還 金	44,000円
		預 り 金	8,739,400円
合 計	13,769,800円	合 計	13,769,800円

<運営費>

収 入 の 部		支 出 の 部	
前年度繰越金	2,899,901円	医療費等給付金	4,800,000円
昭和61年度預り金 より繰入金	4,986,400円	事務運営費等	623,000円
預 金 利 息	600,000円	予 備 費	3,063,301円
合 計	8,486,301円	合 計	8,486,301円

### 2. 昭和60年度学生健康保険組合決算

<預り金>

収 入 の 部		支 出 の 部	
繰越預り金	4,984,000円	運営費へ繰入金	4,103,100円
新入生等組合費	5,992,800円	返 還 金	34,000円
		預 り 金	6,839,700円
合 計	10,976,800円	合 計	10,976,800円

<運営費>

収 入 の 部		支 出 の 部	
前年度繰越金	3,023,254 円	医療費等給付金	4,471,423 円
昭和60年度預り金 より繰入金	4,103,100 円	事務運営費	318,700 円
預金利息	563,670 円	翌年度繰越金	2,899,901 円
合 計	7,690,024 円	合 計	7,690,024 円

○ 昭和60年度の医療費給付件数は 873 件で、1 件当たり医療費給付金額は 5,088 円でした。

訂 正 （おわび）

○第53号（昭和61年10月11日）

- ・ 3 ページ新任神徳教官の「昭和49・5 広島大学大学院文学研究科修士課程退学」を「昭和49・4 広島大学大学院文学研究科博士課程退学」に訂正します。

☆☆☆☆ 学園ニュース編集委員 ☆☆☆☆

学生部長	本田 弘	理学部	松本 賢一
人文学部	山口 幸祐	〃	広岡 公夫
〃	櫛木 謙周	工学部	多々 静夫
教育学部	佐々木 浩	〃	杉本 益規
〃	山本 都久	教養部	高女 <sup>レ</sup> 和子
経済学部	大野 正道	〃	山本 孝一
〃	相澤 吉晴		